15

日本における老年医学の源流

寺畑喜朔

二十一世紀におけるわが国の医学・医療界にとって極めて重要な課題は、老年者をめぐる諸問題である。そこで、日本の老年病学の源流を辿り、その系譜と発展を概観する。

江戸期において老人の健康などに関する著述は、貝原益軒の『養生訓』（一七一三）、貝原の門弟香月牛山の『老人必用養草』（一七一六）をみるに過ぎない。明治期に入りその後期において東京大学入澤達吉教授とその門弟らが諸外国の老人医学関係の著述を渉猟し、また独自の研究成果を集成して一九一二年『老人病学』上下二巻を公刊した。入澤は本書の序に「題シテ老人病学ト称スルモ老人内科ヲ意味ス――小児科ガ独立シテ一科ヲナシ、小児科学ノ名ノ下ニ幾多ノ著書典籍ノ存スル以上、老人病ニ関スル一切ヲ網羅シ《老人病学》ト命名ス、何ノ不可カ之アラン」と述べている。本書はわが国の近代における老年医学に関する公刊書の嚆矢である。第二版は一九二一年（下巻は一九一四）である。

大正十二年九月の関東大震災後、自活不能の老廃疾者、扶養者を失った者の救護を行うため、御下賜金、義捐金を設立資金として「財団法人浴風会」が設立され（大正一四年）、稲田龍吉教授の慧眼による推挙により尼子富士郎が医長として翌十五年に赴任し、わが国近代老人医学の本格的幕開けはここから始まった。浴風会の事業は第二次世界大戦により一時不振となるが、尼子らの不断の地道な努力により、昭和二十一年生活保護法による保護施設として再生復興し、同二十七年社会福祉法人として改組され現在に至っている。その間、設立以来の研究成果は「浴風園調査研究紀要」（第一輯、昭和三）として記録され、のち若干誌名を変え、現在「浴風会業績集」の逐次刊行誌である。本誌は世界的にみても、老年医学の先駆けとなる貴重な学術雑誌で浴風会に完結保存されている。この功績は一に尼子による。紀要の初期のバックナンバーを保存するわが国の医育機関は僅かである。

昭和三年東大第三内科講座において課外講義「老年医学」が開講され、尼子が講師としてこの講義を担当した。医育機関における斯学の嚆矢である。昭和三十九年この講義は発展して完全講座となり、以来徐々に各医育機関で講座が設置された。この間受講し冲中内科に入門した医師らは、後年尼子の薫陶を受け、わが国の老年医学会の推進発展に寄与したことは言を俟たない。

昭和前期の医事雑誌を通覧すると、『臨牀醫学』誌では昭和十・十五年の二回にわたり「老人病」の特集を編集しており、斯学への関心が醸成されつつあったことを窺い知ることが出来る。更に斯学の大きな前進の第一歩となったのは、尼子の第十三回日本医学会（昭二六）における特別講演「老年者の生理病理と臨床」である。これは俗風会病院における長年集積した二〇〇〇例を超える剖検例を精細に分析した貴重な報告であり、翌年には『日本臨牀』（一〇一～一〇三号）誌はシリーズで「老年者の医学」を特集した。

昭和二八年緒方知三郎らの提唱で「老人病研究会」発足、つづいて老年科学研究会（昭三〇）、緒方、尼子、冲中共編『老人病学』発刊（昭三一～三二）、第一回ジェロントロジー学会（昭三一、日本老年学会の前身）専門誌『老年病』発刊（昭三二）し、ここに老年医学は開花するに到った。現在、老人に関する医学、社会学分野の関連雑誌は一二〇件、刊行書は一〇〇点を超えている。

尼子は平素から老年医学関係の文献を検索し、奉仕的事業として「老年学文献集」（昭三六～四三）を斯学関係者に配布しており、その貢献は大きい。また、尼子は父四郎が明治三六年に創刊したわが国で最長年月発行の記録をもつ「医学中央雑誌」発行の事業を継承した功績、格段に評価されよう。尼子は昭和四七年三月一七日鬼籍に入る。門弟達は尼子の恩恵に報いるため、没後大冊「尼子富士郎著・老化」を編集し、世に贈った。

（金沢医科大学）